

## ルカによる福音書18章9-43節 「神の国に入る道」

### 1A へりくだり 9-30

1B 祈りの中で 9-14

2B 子供のように 15-17

3B 全てを捨てる 18-23

4B 神にしかできない救い 24-27

5B 捨てた者の報い 28-30

### 2A 主への従順 31-43

1B 悟れないキリストの使命 31-34

2B 目が開かれ、弟子となる盲人 35-43

## 本文

ルカによる福音書 18 章の 9 節から見ていきます。中途半端なところで前回、終わったかもしれませんが、実はそんなことはありません。イエス様が、18 章 9 節から語られていくことは、「義と認められる」ということ、「神の国に入る」ということ、「永遠のいのちを得る」ということ、そして、「救われる」ことなどが話題になっています。つまり、どのようにして救われるのか、神の国に入るのか？そして神の国に入るのに必要な義とは何なのか？そういったことを見ていきます。前回の学びは、17 章の続きで、神の国はいつ来るのか？というパリサイ人の質問の続きでしたが、その神の国にあなたがたはここまでは入れないよ、という警告にもなっています。また弟子たちにも、神の国に入る条件を教えておられます。

### 1A へりくだり 9-30

#### 1B 祈りの中で 9-14

9 自分は正しいと確信していて、ほかの人々を見下している人たちに、イエスはこのようなたとえを話された。10 「二人の人が祈るために宮に上って行った。一人はパリサイ人で、もう一人は取税人であった。11 パリサイ人は立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私がほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦淫する者でないこと、あるいは、この取税人のようでないことを感謝します。12 私は週に二度断食し、自分が得ているすべてのものから、十分の一を献げております。』13 一方、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言った。『神様、罪人の私をあわれんでください。』14 あなたがたに言いますが、義と認められて家に帰ったのは、あのパリサイ人ではなく、この人です。だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるのです。」

祈りについてのイエス様の教えのように見えますが、ここではそこが焦点ではありません。1 節

から 8 節までに、いつでも祈るべき、失望してはいけないことを教えておられたので、祈りを例にとってイエス様は語っておられますが、ここでお語りになりたいことは、義と認められることについて、それは、へりくだるところに与えられるのであり、自分を正しくすることではないということを教えておられます。

「自分は正しいと確信していて、ほかの人々を見下している人たち」と言われています。ここでは主にパリサイ人たちの考える正しさであります。けれども、一般的にも人々は自分たちの中でこれこそが正しいと考えているものがあります。そして、自分を絶対に正しいと思っていると、必ず行っているのが「見下し」ですね。自分とは基準が違う人たちを見下し、蔑んでいます。神のみが正しいのに、自分を神のようにしています。そして、基準が違う人たちも神に愛され、大切にされているのに、ないがしろにします。

パリサイ人たちは、律法、いや律法についての解釈ですが、その言い伝えを遵守することこそが義と認められる道であると考えていました。そして、ルカの書いている人々、つまりギリシア人の考え方においては、正しい人というのは、「知的に洗練されている」「慣習や法的基準を遵守する人」の事を示していました。これは、今の私たちの考える正しさにも重なるのではないのでしょうか？粗雑に語る人よりも、冷静に、客観的に語り、知的に語る人のほうが正しく見えます。呻いている人、叫んでいる人、泣きじゃくっている人よりも正しく見えます。後で、盲人が叫んで制止される場面が出て来ますが、そういう人は正しく見えませんね。そして、慣習や法的基準を遵守しているということもそうですね、きちんと空気を読む人。そして、法律もきちんと守れば、それが正しいと思われれます。

けれども、聖書を読むと、そのような正しさとは、違う姿を見ます。初めからそうですね、カインとアベルですが、どうしてアベルが正しいとされて、カインの供え物が受け入れられなかったのでしょうか？表面的に読んだだけでは、さっぱり分かりません。そして、ノアですが彼は正しい人であるのに、最後、泥酔で全裸になって眠っていた話が出て来ます。そしてアブラハム、イサク、ヤコブは、お世辞にも正しい人だとは言えませんが、正しい人たちとして数えられています。そして、イスラエル人たちは。荒野の旅をしている時に、不平は鳴らすは、偶像礼拝はするは、さんざんですが、バラムがイスラエルの宿営に向って預言した時に、「民数 23:21 ヤコブの中に不法は見出されず、イスラエルの中に悪さは見られない。」と言っているのです。ダビデもそうですし、違いますね。

けれども、その人々全員に共通して言えることは、「神の恵みに見出されている」「神の好意を受けている」「神に愛されている」ということです。聖書において、義人とは、特定の倫理的基準を満たしている人のことではないのです。「むしろ神の御前で受け入れられる特別な関係を許された個人あるいは共同体」だとの注解がありました。<sup>1</sup> 今回の箇所の学びは、ここがテーマになってい

<sup>1</sup> 「中東文化の目で見たイエス」ケネス・E・ベイリー著 525 頁

ます。義人とは、私たちが普通に考える義ではないのだよ、ということです。むしろ、神の救いを受け入れる人々のことです。イザヤ書には、義と救いが一對で出て来ます。

「祈るために宮に上って行った」とのことですが、これは神の宮において、決まった時間に献げられる礼拝における祈りです。ペテロやヨハネも、使徒の働きで午後三時の祈りに宮に上りにいったことが、使徒の働きに書かれています(3:1)。その時に、罪の赦しのためのいけにえが祭壇で捧げられ、ラツパやシンバルが鳴らされます。詩篇が朗読されて、祭司が聖所に入って、香を焚きます。バプテスマのヨハネの父ザカリヤが、その務めを行っていましたね。「1:10 彼が香をたく間、外では大勢の民がみな祈っていた。」とありました。そこで、祭司が聖所の中に入って行く時に、礼拝者が一人一人、思いのままに祈るのですが、その場面をイエス様はここで取り上げているのです。

ここでパリサイ人が、「立って、心の中でこんな祈りをした」とあります。この訳は、口語訳で「立って、ひとりでこう祈った」とあります。こちらの方が良いでしょう、彼らは汚れた者から汚れされることを避けていました。ですから、祈っている間にさえ、汚れている者に触れることがように距離を取って、独りで祈りました。その様子をイエス様はここで言われています。祈りというのは、自分の心を注ぎだして、その汚れや罪を清めていただくようにするのが祈りではありますが、彼らは、「汚れた者に触れると汚れる」という一つの律法に拘り、そればかりを求めたために、肝心な祈りの姿を台無しにしていたのです。そういうことなので、彼の祈り、というか、祈りにさえなっていませんが、「神よ。私がほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦淫する者でないこと、あるいは、この取税人のようでないことを感謝します。」となっています。

そして、「私は週に二度断食し、自分が得ているすべてのものから、十分の一を献げております。」と祈っています。パリサイ派の律法の遵守の仕方は、次のようなものです。「一つの戒めを守るために、その守るための塀を作る」という考えです。花の園があって、その花を守るために、塀を作りますが、花が律法で、その律法を守るための塀が、口伝律法です。断食については、レビ記 23 章に、贖罪日に身を戒めると言う言葉があり、年に一度、神から命じられています。けれども、年に一度だと、うっかり忘れてしまうかもしれないので、前日とその後の日にも断食をしておこう、とします。そして、それだけでも忘れてしまうかもしれないので、三大祭りの日とその前後の日にも断食しようとなります。いっそのこと、週に一度、二度、守っていれば、贖罪日の断食は決して忘れないだろう、ということになります。十分の一の献金も同じで、彼らの口伝律法には、土から生えて来るものは全て、什一を献げるとしていました。

そして次に、取税人を見てみましょう、「取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言った。」とあります。イスラエル人が祈るところがあるのですが、神殿の入口のところなのですが、そこにも立ち入っていなかったのかもしれませんが。そして、胸を叩いているとありますが、これは嘆き悲しむ動作です。礼拝における祈りの姿勢として、両腕を胸に十字に組む

というものがありましたが、彼は自分の罪深さに心が痛み、その恰好のままで胸を打ちたたいていました。今でも中東では女性が胸を叩くしぐさをするそうですが、相当、悲劇的なことが起こると男性を行うそうです。イエス様が十字架に付けられて死なれた後に、群衆もみな、「23:48 悲しみのあまり胸をたたきながら帰って行った。」とあります。

そして、「神様、罪人の私をあわれんでください。」と祈っています。この祈りは、「贖ってください」とも訳せるそうです。今、祭壇で罪の犠牲のための羊が献げられていますから、罪の赦しをここで願っています。

そしてイエス様の言葉です。義と認められたのは、取税人のほうなのです。ここで知ってほしいのは、これこそが新約だけでなく、旧約、聖書全体に貫かれている、「義」の定義なのです。神が正しい方であり、そして神の憐れみと恵みにあずかっているというところに、その人が義と認められているかどうかの分岐点があります。神との正しい関係こそが、義を成り立たせているのであって、それは神の前で自分を低くして、自分の義ではなく、神の憐れみと恵みに拠り頼む者です。

## 2B 子供のように 15-17

そこで次の話に移ります。場面は変わりますが、神の国に入るには、子供のようにならないといけないとイエス様は教えられます。

15 さて、イエスに触れていただくこと、人々は幼子たちまで連れて来た。ところが、弟子たちはそれを見て叱った。16 しかし、イエスは幼子たちを呼び寄せて、こう言われた。「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。邪魔してはいけません。神の国はこのような者たちのものなのです。17 まことに、あなたがたに言います。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに入ることはできません。」

当時、贖罪日などにラビが小さな子たちに触って、祝福するような習慣がありました。今、ここでイエス様のところに近づき、祝福してもらおうとしています。小さな子たちは、難しい言葉での祝福ではなく、そのような手で触れるということによって、神の祝福を受けていることを知ることができたでしょう。弟子たちはやめさせようとしています。当時は、今よりもはるかに、子供は低くみなされていました。私が初めて聖地旅行に行った時に、ヴィア・ドロローサでアラブ人の大人が子供をびんたして、叩いているのを見て、びっくりしました。子供は低くみなされていたのです。しかし、イエス様は「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。邪魔してはいけません。」と言われます。イエス様のところには、そのように小さい者たちもだれもが近づくようにしておられることを見ることができます。物理的に子供だけでなく、小さくみなされている者たちが神に受け入れられています。

そして実は、この子供たちに神の国に入る正しさ、義の側面があったのです。取税人のところで

は、へりくだるということでしたが、ここでは、「素直になる」ということでしょう。子供のように、単純に信頼し、聞いたことに従います。そこには、へりくだりもありますが、そのまま信じる素直さも含まれます。私たちの考える義について、もう一度、思い出してください。知的で、常識をきちんと守り、法律も守っているような人たちが正しい人だというのがギリシア人の考え方でしたが、私たちも知的なものが正しいという思いをしています。また常識的なものが正しいとしています。けれども、そんなことは絶対にありません！たくさん知識をもって、理路整然と話している人たちが、神の国からほど遠いことはしばしばあります。次の、金持ちの指導者はその典型です。見た目には、非の打ちどころがないような人です。けれども、イエス様から離れて行きました。イエス様は既に、幼子のようにご自身を信じている弟子たちのことを御父に対して賛美していました。弟子たちが悪霊を追い出して、イエス様のところに戻って来た後のことです。「10:21 天地の主であられる父よ、あなたをほめたたえます。あなたはこれらのことを、知恵ある者や賢い者には隠して、幼子たちに現してくださいました。そうです、父よ、これはみこころにかなったことでした。」

### 3B 全てを捨てる 18-23

そして午前礼拝でお話した、金持ちの青年の指導者の話に入ります。

18 また、ある指導者がイエスに質問した。「良い先生。何をしたら、私は永遠のいのちを受け継ぐことができるでしょうか。」19 イエスは彼に言われた。「なぜ、わたしを『良い』と言うのですか。良い方は神おひとりのほか、だれもいません。20 戒めはあなたも知っているはずです。『姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。偽りの証言をしてはならない。あなたの父と母を敬え。』」21 するとその人は言った。「私は少年のころから、それらすべてを守ってきました。」18:22 イエスはこれを聞いて、彼に言われた。「まだ一つ、あなたに欠けていることがあります。あなたが持っている物をすべて売り払い、貧しい人たちに分けてやりなさい。そうすれば、あなたは天に宝を持つこととなります。そのうえで、わたしに従って来なさい。」23 彼はこれを聞いて、非常に悲しんだ。大変な金持ちだったからである。

「永遠のいのちを受け継ぐ」ということは、神の国に入ることと同じように彼らは捕えています。メシアが来られて、神の国を立てられ、復活した義人たちは永遠に生きるようにされるといことです。ここでの金持ちの青年の指導者の問題は、金そのものではありません。人間そのものに可能性を見出していることです。「良い先生」ということそのものが間違っています。本質的に良い(ギリシア語のアガソス)のは、神ご自身しかいません。それなのに、彼はイエス様を人としながら、けれどもそこに神の性質があるかのように語っているのです。

今の世界にある問題は、人間に神にしかない解決を求めていることです。平和について、神とキリストにしか解決はありません。けれども、人が成し遂げることができると考えています。環境についても、人間や政府は最善の努力をすべきですが、限界があります。神が支配しておられるの

です。そして、霊のいのちについても、何か自分たちにある気前良さや、親切、何らかの善にあるかのように考えています。何か、道徳的に良いことをしたら、それが神の国につながっているのだというばかりに。

しかし、イエス様は、「あなたが持っている物をすべて売り払い、貧しい人たちに分けてやりなさい。」と言われました。これは、あなたがどんなに戒めを守って生きていたとしても、全く自分にはできないことがあるのだよ、ということを言われています。自分には何一つ良いものがないということ認めて、自分にある可能性を一切捨てて、イエス様に明け渡すということによってのみ、永遠のいのちを得ることができるし、神の国を受け継ぐことができます。そのそも、永遠のいのちとは、御子にのみあるのであり、この方につながっていることによって与えられています。外面的な行いではなく、関係性なのです。

#### 4B 神にしかできない救い 24-27

24 イエスは彼が非常に悲しんだのを見て、こう言われた。「富を持つ者が神の国に入るのは、なんと難しいことでしょう。25 金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうが易しいのです。」26 それを聞いた人々は言った。「それでは、だれが救われることができるでしょう。」27 イエスは言われた。「人にはできないことが、神にはできるのです。」

私たちの生きている世界は、何とかして貧しさをなくそうというところに集中しています。それはとても良いことです。けれども、富んでいることについて同じような注意を払っているか？というところではありません。なぜか？世は、神がいなくても生きて行けるようにしているからです。富の根本的問題は何でしょうか？イエス様が、こう言われた通りです。「16:13 どんなしもべも二人の主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛することになるか、一方を重んじて他方を軽んじることになります。あなたがたは、神と富とに仕えることはできません。」富が神を信じ、神に仕えることを妨げる大きな理由は、神のように富を信じ、富に仕えるようにさせてしまうからです。神を信じて、神に仕える必要を見出せないからです。神なしには生きていけない、というようにしないからです。事実、神なしに命はないのですが、なくても命はあると欺くからです。ライディキアの教会がそうでしたね、「黙 3:17 あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、足りないものは何もないと言っているが、実はみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸であることが分かっていない。」

そして、イエス様は極端な例を使って、子供でも分かるように、はっきりとさせておられます。らくだは、中東において当時、彼らにとって知られている最も大きな動物でした。そして、針の穴は、私たちが知っているように、縫い物をする時の針の穴です。そんなことはだれができるのか？ということですね。そう思うと、私たちはどこかで、人間には救われることのできる何かがあって、その潜在力が発揮されて、それで信じることができるようになったのだと思います。例えば、あの人は真っ直ぐに考える性格だから、それが生かされて信じるできるようになったとか。この人はすべ

て物事を合理的に考えるので、神の国に入るのは難しいとか。これ、みんな人間の可能性の話をしているんですね。弟子たちには、単純直情のタイプもいれば、実際的で合理的、懐疑的な者もいましたね！前者がペテロ、後者がトマスです。性格など、全く関係ありません！人間は、まずもって救われないのです！全く救われるために必要なことを備えていません。救われるのは、神の憐れみと選びによるのです。

そして、弟子たちは、「それでは、だれが救われることができるでしょう。」と言っています。富があることは、アブラハムへの祝福のように神からの祝福であり、当然ながら神の国に入れるというのが、当時のユダヤ人たちの考えでした。

とても重要な一言をイエス様は言われます。「人にはできないことが、神にはできるのです。」神の国に入ることについて、義と認められることについて、永遠のいのちについて、すべては、日本語で分かり易いなら、「神業(かみわざ)」なのです。

#### 5B 捨てた者の報い 28-30

28 すると、ペテロが言った。「ご覧ください。私たちは自分のものを捨てて、あなたに従って来ました。」29 イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに言います。だれでも、神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子どもを捨てた者は、30 必ずこの世で、その何倍も受け、来たるべき世で、永遠のいのちを受けます。」

ペテロは、金持ちの青年の指導者が悲しんで去って行ったのを見て、けれども自分たちはあなたに従っています、何もかも捨てて、と言っています。ちょっと自慢気に話していますね。富があることが神からの祝福だと考えられていた時に、それでも何もかも捨てて従ったのは、相当の覚悟だし、決断でした。けれども、自慢してしまっただけは、あらら、という感じです。どう見ても、表面的には、ペテロより、先ほどの青年のほうが真面目で、正しく見えたに違いありません。けれども、イエス様は、神の国に入り、そこで報いを受けるのは、その青年ではなく、ペテロのような弟子たちであることを保障しておられます。

主は、神の国のために家族を捨てるということを言われていますが、これはそのまま捨てることを意味してはいませんね。「家」と初めに書いてあるように、自分の第一の忠誠心が家から、神の国に移ったことを意味します。私たちが生きている個人主義の社会よりも、はるかに当時のその地域は家が重んじられました。その中でそれでもイエスを主としていくということは、物理的に捨てるわけではないけれども、あたかも捨てるような状況になります。私が、スクール・オブ・ミニストリーで学んでいた時に、元モルモン教の宣教師がいました。モルモン教徒であっただけでなく、宣教師にもなったのです。ところがイエス様を知って、クリスチャンになりました。奥さんや子供は？と言いますと、はい離婚協定によって、親権も相手に譲渡して、独り身となったのです。家をこのよう

に捨てなければいけなくなることもあるでしょう。ペテロは、いつも妻を同伴させていたことがコリント第二に書いてありますが、パウロはおそらくは、今、話した元モルモン教徒の兄弟と同じように、離婚して独身になったのではないか？と思われる。

そして、神の国に入るまで、この地上においても、報いを「その何倍も受け」とあります。そうですね、異なる形で霊的に、その失われたものを補うだけでなく、何倍もあまりある祝福を受けます。肉の家族を失っても、霊の家族が数多く与えられるであるとか。そして神の国において、永遠のいのちという、究極の報いを受けます。

## **2A 主への従順 31-43**

こうやって、何もかも捨ててイエス様に弟子たちは付いてきていますが、一つ問題があります。「イエスが誰であり、この方が何のために来られたか？」ということについて無頓着なまま付いてきている、という問題です。そのことが次でイエス様は語られています。

### **1B 悟れないキリストの使命 31-34**

31 さて、イエスは十二人をそばに呼んで、彼らに話された。「ご覧なさい。わたしたちはエルサレムに上って行きます。人の子について、預言者たちを通して書き記されているすべてのことが実現するのです。32 人の子は異邦人に引き渡され、彼らに嘲られ、辱められ、唾をかけられます。33 彼らは人の子をむちで打ってから殺します。しかし、人の子は三日目によみがえります。」34 弟子たちには、これらのことが何一つ分からなかった。彼らにはこのことばが隠されていて、話されたことが理解できなかった。

エルサレムへの旅が最終段階に入っています。間もなくエリコに入り、そして、エルサレムへと上って行きます。そこで十二人をそばに呼んで、かつて語られた、ご自身が来られた目的について語られました。「預言者たちを通して書き記されているすべてのことが実現するのです」と強調されていますね。キリストが苦しみを受けることについての預言です。主が復活された時に、エマオに行く途上の二人の弟子に、こう言われました。「24:25-26 ああ、愚かな者たち。心が鈍くて、預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち。キリストは必ずそのような苦しみを受け、それから、その栄光に入るはずだったではありませんか。」そしてモーセや預言者たちから始めて、聖書全体からご自分について書いてあることを説き明かされた、とあります。

そしてイエス様が強調されたのは、「異邦人から辱めを受ける」ことでした。これは明らかに、ローマによって十字架に付けられる囚人が受ける辱めそのものであります。神の国について、救いについて語っておられるのに、私たちの主は何を言っておられるのか？と、彼らは全く分からなかったのです。興味深いことに、イエス様は比喻でも何でもなく、そして弟子たちが全く知らない事でもなく、ローマの支配の中に生きているユダヤ人なら誰でも知っている辱めを、語っておられたの

ですから、理解できないことを語られたのではなかったのです。しかし、それでも全く分からなかったのです。それは、キリストが苦しみを受け、それから栄光に入るというシナリオが、神の国の中にあつたとは彼らは全く思わなかったのです。

ここで、「彼らにはこのことばが隠されていて」とあります。問題はもちろん、彼らの頑なさがあるのですが、それよりも神ご自身の計画の中でそうされていたのです。私たちは、神に隠されていることがあります。パウロは、こう話しました。「I コリ 2:7-8 私たちは、奥義のうちにある、隠された神の知恵を語るのであつて、その知恵は、神が私たちの栄光のために、世界の始まる前から定められたものです。この知恵を、この世の支配者たちは、だれ一人知りませんでした。もし知っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。」弟子たちは、主が甦られた時にこの説明を受け、そして聖霊が注がれて、それで彼らもこのご計画を語り始めました。

私たちは、「キリストが苦しみを受け、それから栄光に入る」という福音を伝えていると同時に、私たち自身も、キリストに従う者たちとして、キリストにある苦しみを受け、それから栄光に入るという神のご計画の中に入っています。その渦中にいれば、弟子たちのように隠されている部分もあります。なぜ、こんなことが起こるのだろうか？などと思います。そして弟子たちと同じように、自分自身がすべてをイエス様に明け渡したとした後に、このようなことが起これば内側の葛藤は熾烈です。その時に必要なのは、イエス様を見るということです。主から目を離さないということです。「ヘブ 12:2 信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをものともせず、十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。」

## 2B 目が開かれ、弟子となる盲人 35-43

そして次に、目の見えない人を主が癒される出来事を読みます。それはあたかも、弟子たち自身が、イエス様に対して目が開かれる必要があることを物語っているかのような出来事です。

35 イエスがエリコに近づいたとき、一人の目の見えない人が道端に座り、物乞いをしていた。

エリコに近づきました。ここは、死海のすぐ北にあり、ヨルダン川のすぐ西にあります。イエス様一行は基本、ペレア地方を南に下って来て、そしてエリコに入り、そこから徒歩一日の道のりでエルサレムに入ります。エリコは、死海と同じように低地にあり、実にエリコからユダ山地にあるエルサレムの標高差は、一キロです。時期は、間もなく過越の祭りでしたから、多くの巡礼者も同じ道を辿っていたことでしょう。

エリコの近づいた時に、「一人の目の見えない人が道端に座り、物乞いをしていた」とあります。エリコはかつての旧約時代のカナン人の町のように、そこはオアシスともなっているため豊かに農

産物を実らせることができ、新約時代も栄えていました。ユダヤ人には、律法で貧しい者に施しを  
しなさいという命令がありますから、盲人のように何も働けない人たちには施しをしていました。そ  
うやって、彼は生きていました。ちなみに、マルコ 10 章 46 節では、エリコを出ていくとこの盲人が  
居たと書いてあります。エリコは、旧約時代のエリコもあれば、新約時代に新たにヘロデが宮殿の  
ために建てた町がありました。

36 彼は群衆が通って行くのを耳にして、これはいったい何事かと尋ねた。37 ナザレ人イエスがお  
通りになるのだと人々が知らせると、38 彼は大声で、「ダビデの子のイエス様、私をあわれん  
てください」と言った。39 先を行く人たちが、黙らせようとしてたしなめたが、その人はますます激  
しく「ダビデの子よ、私をあわれんでください」と叫んだ。

ここで、盲人の行動が、明確にイエス様をメシアだと知って、叫んでいるのが分かります。「ダビ  
デの子のイエス様」と言っています。旧約聖書に書かれているとおり、ダビデの世継ぎの子が御国  
を永遠に治めるキリストです。そして、メシアが来られたら、神の国が到来し、神の国が到来したら、  
次のことが起こるとイザヤが預言していました。「イザ 34:4-635:4 心騒ぐ者たちに言え。「強くあ  
れ。恐れるな。見よ。あなたがたの神が、復讐が、神の報いがやって来る。神は来て、あなたがた  
を救われる。」そのとき、目の見えない者の目は開かれ、耳の聞こえない者の耳は開けられる。そ  
のとき、足の萎えた者は鹿のように飛び跳ね、口のきけない者の舌は喜び歌う。荒野に水が湧き  
出し、荒れ地に川が流れるからだ。」目の見えない者が開かれるのです。

ここで再び、先に弟子たちが制したように、周りの人々が盲人を黙らせようとしています。けれど  
も、彼はますます激しく叫び始めました。盲目ですから、どの程度の大きさで叫べばよいか、程度  
の加減が分からないでしょう。そして、彼の信念はものすごい強固です、だれをも蹴散らすほどの  
力を持って、イエス様に叫んでいます。先ほども話しましたが、私たちの考える義と違いますね。  
大体、お分かりになってきたのではないのでしょうか、神の憐れみによって、神の救いが与えられ、  
イエス様に永遠のいのちがあるのだと信じて、この方に近づいてくる者たちです。その者たちが救  
われ、義とみなされ、そして神の国を受け継ぐのです。これが神の考えておられる義です。

40 イエスは立ち止まって、彼を連れて来るように命じられた。彼が近くに来ると、イエスはお尋ね  
になった。41 「わたしに何をしてほしいのですか。」するとその人は答えた。「主よ、目が見えるよ  
うにしてください。」42 イエスは彼に言われた。「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを救い  
ました。」43 その人はただちに見えるようになり、神をあがめながらイエスについて行った。これ  
を見て、民はみな神を賛美した。

彼は、もちろん肉眼で見えるようになることを強く願っていましたが、それだけでなく、霊的にその  
後にある神の国をしっかりと見ていたことでしょう。そしてイエスこそがキリストで、この方が主である

こともはっきり知って、それで、「主よ、目が見えるようにしてください。」と言っています。その証拠に、神をあがめて、迷うことなくイエス様について行っています。後の者が先になり、先の者が後になると主は教えておられましたが、十字架に付けられる最後の週に近づいているところで、彼は十字架に付けられるキリストについて行きました。ついて行っている民も、ここで神が驚くべきことをされたことを喜び、神を賛美しています。

十二弟子たちはここで、肉眼は見えているけれども、霊の目が開かれて、それについて行くことができなければ、と思います。けれども、そうではありませんでした、主は彼らを憐れみ、十字架に付けられ、三日目に甦られ、それから聖書全体から説き明かし、そして彼らの目を開かれました。

私たちにも主は、語られていることでしょう。金持ちの青年のように、何か偶像を心に抱いていて、それで真面目に従っているつもりが、それを手放すことが出来ず、イエス様から離れて行きそうになっていやしないか？また、十二弟子たちのように、全てを捨ててイエス様に従っていると思っているけれども、肝心のイエス様がどのような方が、この方が何をされているのかを知らないまま従っているということはないか？しかし、そうではなく、まことの義、まことの救いにあずかっているか？先の取税人の祈りのように、圧倒的な罪の咎めの中で、神の憐れみによって罪を赦していただきたいと願っているか？子供たちのように、ただイエス様に近づき、触れていただきたいと願っているか？そしてこの目の開かれた盲人のように、信仰をもって神の救い、神の国の到来を明確に見ているでしょうか？